平成2６年度第６回大阪府市文化振興会議　議事要旨

１　日　時　　平成2７年３月１３日（金）午前1０時～１２時

２　場　所　　大阪府立国際会議場　会議室１００８

３　出席委員　橋爪会長、中川副会長、池末委員、井上委員、佐藤委員（ＡＣ部会長）、松尾委員、山口委員、山下委員

４　議　題

（１）アーツカウンシル部会の取組みについて

（２）その他

５　議事概要

（１）アーツカウンシル部会の取組みについて

○まず市担当者より、H27年度の市文化事業の概要と新規事業を中心に説明。

・来年度の市予算は約390,000千円。本日午後の市会で予算成立予定。

・主要事業については、資料４のとおり。アーツの提言を受け新規に取り組む事業として、一つはフェス事業を、もう一つは、まちの課題解決のために地域等で実施する、人と地域のエンパワーメントに関する事業。

・また、文楽と大フィルの運営補助金としていた7,500万を再構築し、4,000万を助成金事業の特別枠拡充として、残りの3,500万で古典芸能振興事業を実施する予定。

・また市長の思いが強い、新たな２つの事業を行う。一つは、文楽をモチーフにした地域活性化事業。来年度はその事前調査を実施予定。もう一つは、団体助成に代わるものとして、市民の思いを尊重できる、ふるさと寄付金の創設。芸術文化の団体を市民が直接サポートする体制を整える予定。

○続いて府担当者より説明。

・府予算トータルで約290,000千円。おおさかカンヴァスの予算増や芸術文化魅力育成プロジェクトの新設等により、昨年度に比べて約7,500万増加している。

・来年度の主要事業について簡単に説明。まず、ワッハ上方については、指定管理から府の直営となり、収蔵品リストのデジタル化やアクセス可能な環境整備など、資料の整理活用を充実させる。また、大学と連携して、資料を研究等に活用し価値を高めることや、上方伝統芸能を研究する専門人材の育成も行いたい。さらに、収蔵品の館外展示、公開講座や研究成果の発表等、府民に触れてもらえる機会を増やしていきたい。有識者会議も設ける予定。財源も右肩上がりではないため、国の補助を活用して、上方芸能に資するような振興を進めていく。

・おおさかカンヴァスについては、これまでの事業の蓄積や知事会の先進政策大賞受賞など実績もあることから、多府県からの問い合わせもあり、全国的に注目されている。芸術祭と見れば予算規模は少ないが、大阪のど真ん中でアートの展示が出来る取組みとして、これまで多くの方から応募があった。まちの集客・魅力の創出やネットワーク作りにもアートが一役買っている。２７年度は５年間の集大成として、御堂筋や中之島エリアを中心に行い、最終的には市町村と連携して、府内全域に展開したい。

・芸術文化魅力育成プロジェクト（以下「プロジェクト」）については、アーツカウンシルの分析と提言を踏まえて、府市連携事業として実施するもの。ジャンル間の交流が十分でない、発信力が弱い、人材が活躍を求めて多府県へ流出する、といった負のスパイラルに対し、本事業を継続させて好循環に変えることをめざすもの。募集要項にも、単に事業者の公募ではなく、課題や目的、アーツの考え等を載せている。中央公会堂を大胆に使い、行政では思いつかない、突き抜けた企画を実施して欲しい。

○続いて佐藤部会長より報告。

・大阪市内には公立の劇場やホールがないため、他の自治体のように専門人材やノウハウの蓄積がなく、また集う場がないので様々な連携が十分出来ていない。新プロジェクトの実施や、その実施過程をアーカイブ化し共有化することによって、そうした大阪の現状を少しでも補完させたい。

・アーツカウンシルはこれまで約2年間活動を行ってきた。初年度は評価・審査を中心に、２年目は企画提言も行い、2015年度は調査機能もスタートさせる。現実的に府民にどういうニーズがあるのか、数値的な裏づけのある調査やフォーラムを開催して、しっかり記録を残し、発信するという調査を行いたい。

・アーツカウンシルの体制については、現状のように審議会の部会として、３つの機能を担っていくのは厳しいと感じている。現在の形でやれることをやるのか、新しい形にするのか、来年度夏までに、この会議で検討いただければと思う。

○委員から主なコメントは以下の通り。

・予算増加は大きな成果だが、アーツをもっと機能させる予算は取れていないのでは。

また、アーツについても、何をどれだけやるか、もう一度整理する必要がある。

・調査機能については、設計段階では、文振会議から何人かコアになる人間や府市の職員に入ってもらい、作業結果を蓄積していく予定だった。企画機能も動き出し、調査機能の説明を対外的に果たすためにも、アーツ白書を毎年作成してはどうか。

・また文化事業については、子ども世代にだけ力を入れるのではなく、高齢者などにも目を向けるべき。リタイア後、どうやって文化に親しめばいいか分からない人が多いと聞くので、高齢者を対象に文化バウチャーなどを用意すれば、古典芸能ともリンク出来るのでは。

・ワッハについては、キュレーションとデジタルアーカイブがカギ。プロジェクトがいよいよスタートしたのは素晴らしいが、出来上がるレベルをどこに設定するのかが重要。都構想が実現したら、文化行政はどうなっていくのか？

・広域と基礎自治体でどう考えていくかなど、結果後におのずと見えてくるのでは。

・２点確認したい。まず大阪府市全体について。特別学校や特定疾患の子ども達、生活保護の問題などに対して、英国のアーツカウンシルではアートを活用することで様々な支援を行っている。大阪アーツカウンシルは、このようなソーシャルインクルージョンやアウトリーチ事業は、今後考えていないのか。大阪アーツカウンシルの丁寧な検証・分析を基に作成された資料を見て、この質問に辿り着いた。

・もう1点。カンヴァス事業については、例えば展示場所や資材の提供について企業に手を上げさせて、アーティストを積極的にマッチングさせるやり方の方がいいのでは。現在のカンヴァス事業は時限的なものなので、恒久的なものにすれば、企業側も参加しやすいのでは。

・仰るように、単年度事業としての限界はある。カンヴァス事業は５年目で、様々な蓄積があるが、毎年同じ様に淡々と進めていくべきものではない。基金の財源も少なくなっている中、社会のための芸術としてアプローチしていくのか、まちづくりにシフトしていくのか、今後の進め方についての議論が必要。（事務局）

・カンヴァス事業のベースアイデアとして、dig me outに上海万博のファサードをどうするか、FM８０２に協力してもらったという経緯がある。

・カンヴァス事業については、作品代は府が出し、その作品の10年くらいのメンテを条件に、場所を民間企業に打診するのはどうか。府も企業もアーティストもメリットがあるのでは。

・カンヴァス事業については企業の御用聞きになってはだめ。最終的にはフィーを出せとなるのでは、カンヴァス事業は突き抜けたほうがいい。

・ソーシャルインクルージョンについては、他の都市以上にしっかりしたものがあるが、行政が関与していないため、継続性が心配との声が多々ある。社会的に弱い人と係わり、その人達を一年で放り出すということもなかなかできない。

・カンヴァス事業では、ボランティアや運営スタッフが育ちつつある。これはかなり貴重。ただ単年度で不安定なため、培ったノウハウを持って、人材が府外に出てしまう恐れ。そのため、通年を通して彼らと繋がっているネットワークや事業がいる。また、府に人材をストックするものが必要。でないと、市民層に伝わって行かない。

・都市再生における文化行政の役割を良く考える必要がある。そのため、イベント的なものではなく基礎調査的なものに対する予算が必要では。フランスでは、郊外の再開発が始まる前に、写真による調査、展示、発信など、アートの力で注目させるという例がある。

・文化庁事業の補助金を上手く活用して、それらを実施してはどうか。

・アーツカウンシルについては、今年度はここまできたと一旦総括するためにも、白書は必要では。

・現在の体制では、評価だけでオーバーフローとなっており、人的サポートが必要。アーツという形だけが出来て、佐藤さんが頑張っている今の状態ではとても無理。また、フィーも少なく、しっかりと敬意を払っているのか疑問。金額を審議会報酬で考えてはダメ。法的にどうすべきかも含めて、対応を事務局に検討して欲しい。外野のアドバイザーについても、もっと拡げていかないといけない。

・評価や改善提案については、抜群の内容。的確であり、ここから次が見えてくる。

・各事業の位置づけをしっかりと行うことが重要。新プロジェクトは、都市政策上もさることながら、拠点となる場所が大阪にはないということを逆手に取って挑戦する事業。若いアイデアで突き抜けたものにしたい。

・また、来年度は現計画の最終年であり、次期計画の策定もある。2020年に向けた重要な年と考えている。指摘された点についても、事務局として考えていく。引き続き、先生方からもご意見をいただきたい。（事務局）

・大阪は箱モノ行政とは決別している。だからこそ、箱モノを持たないからこういうことが実現できるということを、もっとアピール出来れば。また、文化政策については広域か基礎か、今後検討する必要がある。

・評価等への活動に対する報酬については、アーツカウンシルが出来る前に、検討作業など、副会長に相当頑張ってもらった。これからどうするか。施策の評価は出来ているが、計画には書いてないものや、具体に見えてないものについても検討する必要がある。それは個別の事業評価とはまた別の話。文振計画上で実現出来ていないものを、我々で考えなければならない。

・情報発信については、作家が大阪を拠点として来てくれるということだけではなく、例えばカンヴァスから世界に出て行ったというような実績も大事だと思う。

・他の委員が仰るとおり、アーツカウンシルがまとめた評価や改善提案のとりまとめは良く出来ており、人材流出についての課題も、まさにその通りだと感じる。

・アーツカウンシルの体制については、常設とすることや、委員の負担が増えることに見合った対応が出来るように、よく考えてほしい。

・アーツカウンシルの来年度の調査予算はいくらくらいなのか。

・調査費は約３００万を想定。（事務局）

・先ほど議論に上がった白書が、アーツカウンシルからの発信か、府市からか発信になるのか、よく検討する必要がある。

・調査の作業は、設計図をどうするかなど、マンパワーがいるとても大変なもの。

・調査部会は、文化行政の意味や考え方をきちっと説明するためにも重要。2年間、アーツはこうやって活動してきたということを発信すればどうか。

・白書については、どのようにするのか次回の会議でアーツから提案いただければ。

また必要があれば、行政がどういうサポートが出来るかも検討すること。

（２）その他

　特になし。

（閉会）